

## クインス台使用セイヨウナシ品種の生産力

高橋清重・松田省吾\*・高橋幸夫\*\*

佐竹正行\*\*・高瀬紘一・野口協一\*\*\*

(山形県立園芸試験場・\*山形県庁・\*\*置賜農業改良普及所・\*\*\*寒河江農業改良普及所)

Productivity of Several Pear Cultivars on Quince Rootstocks

Seiju TAKAHASHI, Syogo MATUDA\*, Yukio TAKAHASHI\*\*, Masayuki SATAKE\*\*,

Koichi TAKASE and Kyoichi NOGUCHI\*\*\*

Yamagata Prefectural Horticultural Experiment Station・\*Yamagata Prefectural

Government Office・\*\*Okitama Agricultural Extension Service Station・

\*\*\*Sagae Agricultural Extension Service Station

### 1 はじめに

セイヨウナシは山形県において、主要果樹の一つで収益性の高い作物である。特に「ラ・フランス」は全国の生産量の約75%を占めており消費者のニーズが高く、今後とも需要が拡大していくものと思われる。そのようなことから、山形県では「ラ・フランス」を主体にしたセイヨウナシ産地の振興にとりくんできた。更に「ラ・フランス」を中心にして、早生種から晩生種までの品種の組合せによる長期間の出荷販売を行なって、経営の安定化をはかるための産地づくりをすすめている。このような産地化をはかる上で、わい性台木を利用したわい化栽培等効率的な栽培にとりくむ必要があり、クインス台を使用した場合のセイヨウナシ品種の生産力について検討したので報告する。

### 2 試験方法

昭和57年春、クインスA、クインスCの両台木にラ・フランス、シルバーベル・ウインターネリスの各品種を接ぎ木し養成した。養成した苗木を翌年の昭和58年4月に4×3mの10a当り83本を場内圃場に植えた。樹形は主幹形で細型紡錘形を目標にして仕立てた。肥料は定植2年目の昭和59年から各年次ごとに1樹当りNを成分量で5g、50g、60g、130g施用した。調査樹は1区10本で、樹の生育、花芽の着生、着果量(収量)、果の品質について調査した。

### 3 試験結果及び考察

樹の生育について表1に示した。いずれの品種もクインスA台に比較して、クインスC台で生育がよかった。品種

表1 樹の生育(昭和63年)

穂品種	台木	樹高 (cm)	樹幅 (cm)	樹の大きさ	同左前年比 (%)	幹周 (cm)	同左前年比 (%)	台負け程度			新梢長 (cm)	新梢本数
								穂	台	比		
ラ・フランス	クインスA	228	73	150	101	14.5	106	15.9	15.2	96	40.0	22.9
	クインスC	287	96	192	99	17.4	107	18.0	13.6	72	34.2	20.7
シルバーベル	クインスA	353	244	299	121	27.7	129	28.3	33.3	118	40.9	126.4
	クインスC	378	262	320	112	27.6	124	28.9	30.1	104	41.4	135.1
ウインターネリス	クインスA	397	222	310	113	21.8	103	22.8	25.7	113	43.4	147.7
	クインスC	411	277	344	126	25.3	109	26.2	26.0	99	39.8	161.8

注. 定植6年目

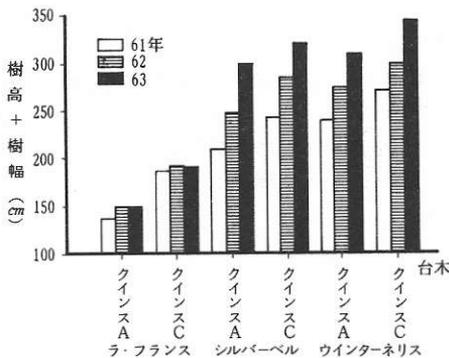


図1 樹の大きさの推移

別では各台木とも、ウインターネリスの生育が旺盛でクインスC台では、樹高が4m程度の大きさになった。次いでシルバーベルがよく、樹高が3・5m程度でほぼ目標とする大きさになった。

「ラ・フランス」については、図1に示したように生育が著しく劣った。定植5年目から生育が停滞しており、今後ともよくなることは期待できない。これは穂品種によりクインス台と接ぎ木親和性が高いものと低いものがあり、「ラ・フランス」は親和性が低いためと考えられる。

花芽の着生及び収量については、樹の生育量に関連し、クインスA台に比較してクインスC台で多かった。品種別による着果量の推移については図2に示した。ウインター

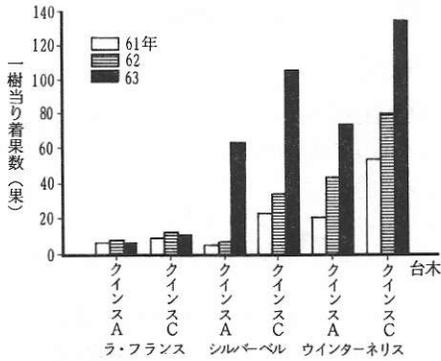


図2 1樹当たり着果数の推移

ネリスは、花芽の着生が早く、定植5年目までの初期収量が多かった。しかし定植6年目になってシルバーベルの着果量が著しく増加し、ウインターネリスより多くなった。

定植6年目の花芽の着生及び収量を表2に示した。10アール当り換算収量は、クインスC台のシルバーベルが3.3tと最も多く、次いでクインスC台のウインターネリスが2.5tで‘ラ・フランス’は極めて少なかった。

定植6年目までの収量の累計を図3に示した。クインスC台のシルバーベルが最も多く、クインスC台、クインスA台のウインターネリス、クインスA台のシルバーベルの順で多く今後とも増加が見込まれる。それに対して、‘ラ・フランス’の収量は著しく少なく、今後とも増加すること

表2 花芽の着生及び収量(昭和63年)

穂品種	台木	1樹当り頂芽数	1樹当り頂花芽数	1樹当り収穫果数	1果重(g)	1樹当り収量(kg)	同左前年比(%)	10a当り換算	
								収量(kg)	累計(kg)
ラ・フランス	クインスA	95.5	72.7	6.7	252	1.68	77.1	139	456
	クインスC	145.6	120.6	11.7	261	3.05	81.6	253	817
シルバーベル	クインスA	546.8	223.5	64.1	433	27.78	884.7	2,306	2,774
	クインスC	702.3	377.4	107.0	381	40.74	325.9	3,381	5,320
ウインターネリス	クインスA	639.0	239.5	75.1	246	18.49	120.2	1,535	3,146
	クインスC	1012.7	484.3	136.7	224	30.55	145.8	2,536	5,146

注. 定植6年目

表3 果実品質(昭和63年)

穂品種	台木	収穫直後					果梗		追熟後		
		1果重(g)	ヨード反応	硬度(ポンド)	糖度(%)	酸(%)	長さ	太さ	硬度(kg)	糖度(%)	酸(%)
ラ・フランス	クインスA	237.5	1.8	10.8	15.0	0.26	2.08	0.56	1.00	14.7	0.19
	クインスC	300.0	1.8	11.7	15.0	0.24	2.02	0.54	0.93	15.3	0.18
	ヤマナシ	277.3	1.4	11.5	13.6	0.25	(1.96)	(0.47)	—	14.0	0.17
シルバーベル	クインスA	444.3	2.7	12.1	14.4	0.25	2.48	0.50	1.12	14.6	0.22
	クインスC	440.9	2.3	12.4	14.6	0.26	2.58	0.45	1.14	15.2	0.24
ウインターネリス	クインスA	—	—	—	—	—	—	—	1.02	15.6	0.12
	クインスC	243.2	2.2	13.6	15.4	0.14	—	—	1.19	16.4	0.12

は期待できない。

果実の品質については表3に示した。糖度が高く樹齢が異なるがヤマナシ台使用樹の果実に比較して、熟期が若干早くなる傾向がみられた。

4 ま と め

以上の結果から、クインス台を使用した場合、シルバーベル、ウインターネリスは、樹の生育がよくわい化栽培に適した大きさになった。また結実が早く早期多収が得られ、単位面積当りの収量も多く生産力が高い。これらの品種では、クインス台を使用した栽培が期待できる。

‘ラ・フランス’はクインス台との接ぎ木親和性が低いいため、クインス台に直接接ぎ木したものは利用価値がないので、中間台を使用した栽培等の検討が必要である。

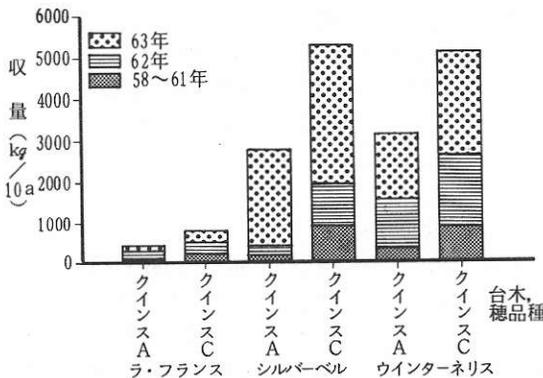


図3 各台木、穂品種別収量の累計(10a換算)